

【実践記録】

病弱養護学校で教科を教えるということ

武藤 素子*

キーワード：教科学習、病弱教育、人生を豊かに

はじめに

1995年4月に伊達高等養護学校で教員として最初の一步を踏み出してから今年で31年目を迎える。初任校は知的高等養護学校であったが、その後義務制の知的養護学校、肢体不自由養護学校、病弱養護学校と、気付けば盲・聾以外の障害種での勤務を経験することができた。それぞれの学校で「教師」という立場で子どもたちと関わってきたことを思い返すと、やはり「どう授業をつくるか」ということが日々のテーマであった。どの学校であっても根本は変わらないと思いながらも、「教科学習」を行う上では障害種や教育課程に応じて自分なりに工夫してきたのではないかと思い、まとめてみることにした。“理論よりも直感”の授業づくりだったが、誰かにとってなにかの端緒になればと思う。

1. 高等養護に教科は必要なのか？

私の教科における所有免許は「中学社会」及び「高校公民」である。教育課程上、当該学年の内容を進める場合、いわゆる「準ずる教育」においては基本的な上記の科目しか教えられないが、それ以外の教育課程では融通が利くため、理科なども受け持たせていただい

た。当時私と関わっていた生徒たちはほとんどが軽度の知的障害であったが、それでもドラゴンボールの「かめはめ波(手から衝撃波を出す技)」は実際にあると思っていたり、厚紙を濡らすとよれよれになることを知らないというような実態であった。この子たちに、世の中の不思議なことを科学的な目で教えてあげられたら…と思い、「たのしい授業サークル」などにも顔を出したりしながらはりきってやってはいたが、とにかく拙い授業であったことは間違いない。当時高等養護学校の中核をなしているのはなんといっても「作業学習」であったが、私は教科的な学習を通して知識を深めてほしいと思っており、なんとなく漂っていた「教科学習なんてやらなくてもいいんじゃないか」という雰囲気にはあらがいたいと考えていた。そこで高等養護学校における教科学習を取り上げていた学習会に参加し、当時定期的に発行されていた組合の職場新聞に参加報告を寄稿した。

その際にタイトルを「高等養護に教科は必要ないか？」としたはずが、発行されたものは「高等養護に教科は必要なのか？」と変えられていた。たかが一文字、されど一文字。ある先生に「タイトル見てびっくりしちゃっ

*むとう もとこ 特別支援学校教員

た！でも中身を読んだらやっぱり必要だ、っていう結論でホッとした～」と言われた。忙しい中で職場新聞を作った先生に文句を言うわけにもいかず抗議しなかったが、おそらく単なる間違いではなく、その先生の教科学習への否定的な思いもあってよりセンセーショナルなタイトルに変えられたのだろうと思っている。

2. 「もじ」の学習を楽しく

その次の赴任校は義務制の知的養護学校であった。国語的な内容である「もじ」の学習で1グループを任されることになり、なんとか楽しい授業をやりたいと考えていた。「作文を書いてみよう」と言ったとたん暗い顔になったMくん。もうこれはなんとしても楽しく作文を書いてもらいますよ！という気になった。多分皆さんそうすると思うが、テーマは「好きなもの」。好きなものとどんなところが好きかを口頭でやりとりしながら箇条書きにし、あらためて原稿用紙に続けて書いたら作文が出来上がった。そのときのMくんのうれしそうな顔といたら！おうちの人に見せると言っており、その後しばらく経ってからたまたまお母さんと話す機会に恵まれた。担任ではなかったのですがそのときがほぼ初めての会話であったが、「作文をやってくれた先生ですね！Mがとても喜んでいました！」と話してくれてうれしかったが、それほどまでに「作文」を書くというのは子どもにとって高いハードルなのだという点も印象深かった。また違う年に、やっとひらがなを読めるくら

いの児童と学習することになった。それまであまり関わりのなかった児童で、相手もなんとなく私のことを警戒しているように感じる。とりあえずその児童が「仮面ライダー」が好きだと聞いて白い紙に仮面ライダーっぽいイラストと「かめんらいだー」という文字を書いてみた。気に入ったようで私の手を持ってもっと書いてほしいようなしぐさをし、何度も繰り返すが、そのうちなんとなく趣向を変えて「マスクライダー(仮面ライダーの英訳)」と書いてみた。とたん彼の目の色が変わり、「マスクライダー」「マスクライダー」と言いながらどんどん催促してくる。「〇〇くんも書いてみたら？」と言ってみるが「俺はいいからお前が書け」というかのような動きである。まあ、文字が書かれていくのを楽しく見るというのもよいかと思い、しばらく「マスクライダー」と書き続けた。たまに「仮面ライダー」と書いてみるが、「もう時代はマスクライダーだよ」という感じでそちらを催促された。担任からは一定時間教室で学習ができていますので十分です、との言葉をいただき、あとはトランポリンで遊んだ。振り返ってみると、文字の学習が嫌になるような取り組みをせずに済んだことは幸いであったと思う。当時はそのことの重要性がわかっていなかったが、ある年、保護者たちの希望で一定時間ドリルに取り組みせることになった児童がいた。直接のかかわりがなかったため詳細は分からないが、その児童は悲しいことがあると「あいうえおかきくけこ…」と五十音を順に叫んでいた。文字を知ることが

喜びとなるような授業実践を行うことのできる環境のありがたさや、拒否の気持ちを表す言葉を知ることも生きた言葉の学習なのだということをこの学校で学んだ。

3.ロバート・ブラウニング

上記のような経験を経て、私は病弱養護学校での実践にたどり着く。この学校の教育課程は当該学年の内容を行う「準ずる教育課程」の他に下学年対応や自立活動中心などいくつかに分かれている。「神経筋疾患」という病気は進路先が非常に限られる場合が多いため、そのような状況の中で教科を教えるということについては各先生方の教育哲学が求められる。つまり、「卒業後も病院にとどまることが濃厚である児童生徒(以下、「生徒」と表記)に対して、どのような思いで教科学習を教えるのか」という姿勢が問われるのである。ゴールが進学でも就職でもない生徒に教科を教えることに対して戸惑いを覚える教師が少なからずいるが、なにか明確な答えがあるわけではないので実際に生徒と対話する中で各自がその意味を見つけていくしかない。私の場合、同僚のいろいろな考えを知りながらたどり着いた現時点での答えとして、「視野を広げて人生を豊かにすること」「登校している間、患者ではなくひとりの学生として学ぶ時間を充実させること」の2点を心がけて実践を行っている。私の本職である「社会科」の実践についても触れたいところだが、生徒が主権者として今の世界への解像度を上げるために欠かすことができない重要な教科であることは説

明するまでもないと思うので、本稿においては割愛する。

さて、生徒が豊かに自分の人生を生きる上で、私は「国語」の力も欠かせないと考えている。自分の考えを言葉として発すること、文章に表せることも大事だけれど、古典文学から現代の小説に至るまで、あらゆる時代の他人が書いた創作に触れることで内面を豊かにしてほしいという思いがある。

最初に述べた通り私は国語の免許がないのだが、(国語が好きで最初国語教師を志したけれど、いろいろあって社会科教師となった)、今から2年前に下学年の内容で対応する高校生4名のグループで国語の担当となった。その時の実践について、前掲した「視野を広げて人生を豊かにすること」、そして国語という教科において理想としている「あらゆる時代の他人が書いた創作に触れることで内面を豊かにしてほしい」というテーマと重ね合わせて実践したエピソードをいくつかあげていきたい。

「詩の鑑賞」で、金子みすゞや谷川俊太郎などの詩とあわせて外国語を訳した詩としてブラウニングの「春の朝(あした)」という詩を紹介したときのこと。私が「ロバート・ブラウニング」と作者名を読みあげると、普段あまり口を開かない生徒が感慨深げに「ロバート・ブラウニング」とつぶやいた。そのときの満足げな表情は、「これから自分は『ロバート・ブラウニング』の詩を学ぶのだ」という喜びや期待に満ちたものに私には見えた。「春の朝」は、のんびりした春の朝の風景を描写

したもので、100年以上前のイギリスの詩人だけれど内容は決して難しくないところも親しみやすく、時代を越えて同じ春の風景を見ているような良さがあった。「例え住んでいる国や文化が違っても、人間はきっとわかりあえる」ことの基礎につながったのではないかと書くとおおげさだろうか。

またあるときは感情を表す場面描写として、例えば『魔女の宅急便』(角野栄子著)で主人公のキキが涙がこぼれないように上を向く場面や、『桐島、部活辞めるってよ』(朝井リョウ著)で登場人物が自分のいらだちをカバンの黒い色と重ねて表現する場面などを取り上げ、とりわけ各自が感じてきたであろう「負の感情」について作品の登場人物を通して触れていく時間を設けた。つらい気持ちになったとき、自分ではどうしてもできない事態に苦しむとき、なにかしらの創作物が彼らに寄り添う友となってくれたらよいと願っている。

さらに、私はなかなか流行に接することのできない生徒たちに対してある試みを仕掛けた。それは、「これから映画化される作品の原作をいち早く読み終える」という実践である。まさに皆さんにこの文章が届くであろう2026年3月、『プロジェクト・ヘイル・メアリー』という映画が日米同時公開される。この作品の原作小説は、何もあらずじを知らずに触れることで驚愕の読書体験ができるとい

う稀有なもので、私はまだ彼らの身近でこの作品が話題になっていないうちにこの長編小説を(ダイジェストにしてはいるが)一緒に読み、生涯思い出となる読書体験をプレゼントすることにしたのである(学校の電子書籍で購入をお願いした)。登場するキャラクターや機器についてあれこれと考察しながら毎時間少しずつ読み進め、さて、2年後には映画が公開になるからその時どんな風実写化されているか答え合わせをしよう、といてこの単元を終えた。すでに卒業している生徒が大半で、彼らがこの作品を目にするのはさらに先、地上波かサブスクで公開されるときになるかもしれない。しかし、その時には教室でみんなで一つの物語を読み、遠い世界に思いをはせた気持ちを思い出してほしいと願っている。実はこの作品、究極の異文化理解と信頼を描いた物語であり、病弱養護学校でいろいろな職種の大人たちと関わりながら生きる生徒たちへの私からのメッセージにもなっている。

4.おわりに

進路についての会議の中で、我々にとっての進路学習は「生徒が幸せに生きるためのテーマを考える」ことだ、という名言を発してくれた先生がいた。そのための教育実践、教科学習の工夫を今後も積み重ねていきたいと考えている。